

枯 枝 を 焼 く 一寺の秋 (1) 一 原 田 慶

庭の木々の枝をはらったものが、昨年の秋から山積みになっていた。春から夏を過ぎて、すっかり枯れた古い枝は、ポリポリとくだけるように折れる。

椋の大木の下で、焼却炉に、少しずつ燃やしながら、空を見あげる。ずっと、どこまでも伸びているかのように見える椋の枝が、空の風に吹かれて、上の方で小さくゆれ、葉ずれの音をたてている。

じっと見上げていると、心が舞い上ってゆくような不思議な楽しさが湧いてくる。この下に座れば、人はみな同じ思いにとらわれるのではないだろうか、などとおもいながら、ふと我にかえって、また枯れ枝を火にくべる。パサッ、という音をたてながら、鳩が、椋の実を食べにくる。細い枝にとまると、重みで枝は大きくしなみ、飛びたつと、乾いた音をたてて、はねかえる。

春の芽吹きの際には、めじろたちが、かわいらしい声で鳴き交わし、よくたしかめなければ、その姿は、枝の中の黒い点のように、見失ってしまいそうに小さいのである。

役にもたえず、そこにある必然性も感じられない樹木が、庭に立ち並んでいる。ひごる掃きそうじなどが

ら、樹とさえ思っていなかつた樺杭が、ある日、突然、地面いっばいの葉を落してきたり、何かの幼虫である毛虫を、からだ中にくつつけて得意げに腕を払げてみせたりするのに、驚かされることがある。

「あの隅のあたりは、樹が混みすぎているのではありませんか。むくろじにみずもち、枇杷の木にきょうちくとうの大株、あおきに山吹に芭蕉：、何のためにあるのか、と思えるものもありますよ」

「何のためにあるのか分らんような、役にもたたん樹が、ぬうつと、立っているのが、好きなんや」

椋の太木の下に座って、空を見上げていると、人の心を吸いあげて、高い空へ放ってくれるような気がして、なんとすることも無い木がぬうつと立っているのが好きだという人の思いに、うなづいている。

生　　き　　も　　の　　た　　ち　　一寺の秋（2）

鳩は、ドテッポポと手本どおり鳴く時と、ブツンというような音を出す時がある。どんな時に声が変わるのかわからないが、白いふんが木の下に散らばっているのを見ると、ブツン、と鳴くのを、思い出す。

十三年ほど以前、というのも娘の生れたのと同じ年だからであるが、鳩のふんから、桐が芽を出した。

今は空をおおうばかり大きい葉をひろげ、丈高い樹になっている。今年の早春、この木の上に鳩が巣を作った。桐の花の咲くまで、まだ葉も繁ってはいなかつた。

雨の日も動かず卵をだき続ける鳩に、他の鳩は近づく様子がまったくくない。雄の鳩はどうしているのだろうか、



巢にじっとしている鳩はいつえさをとりにゆくのだろうか、しきりに気にしていたが、そのうちに葉が繁り、楽しみにしていた花は咲かなかった。

そして、鳩の卵は、かえらず、ある日、風で下に落ちた卵が、つぶれているのを、みつけた。一ヶ月くらいだき続けられたのに、ただのつぶれた卵だった。

その後、木の上の巢を双眼鏡でのぞいてみたが、何もいる様子はなく、飛びたつていった親鳩も帰って来なかった。今年の春にも、もみじや檜に巢をかけようとしたつがいの鳩があつたけれども、私達は、はこばれてきた小枝などをとりはらつて巢を作らせなかった。

これもまた、十五年くらい以前のことであるが、庭の小さな池に、

甲の長さ三〇センチほどの亀が三匹、もつと小さい亀も二匹くらい、いたことがあつた。どういうわけか、誰かが、持ってきて入れて行ったのか、その頃には、知らぬうちに亀が集つたのである。

その中のいちばん大きい亀が、春の早朝に、寺の裏にある墓地に行つて、墓石の間の砂に卵を産む。

それは何年も続いた。早朝、ふと裏口の戸をあけると、ゆっくり、ゆっくり、産卵している亀に、出あうのであつた。



いちど、家人が割りばしを使って、そつと掘り出してみると、まんまるくて、透きとおる、あたたかい卵が、十個くらいあった。しかし、子亀が生れたことは、一度もなかった。

いつかの春、池のそうじをしていると、冬眠をあやまったのか、底の、こわれた壺の傍で、この亀が死んでいるのをみつけた。

そのうち、別の亀が卵を産むようになったが、何度めかの春、墓地へ行かずに、門を出て、工用の砂のところへ産卵に行き、車にひかれて死んだ。

それから後、亀の姿を見ることが、まったくなくなってしまった。



今日、落葉の下で、カサコソと音がするので、のぞいてみたが、何もいない。先日、青大将のこどもを見たので、またそうだろうかと思った。からだがべたんとうすく、乾いた土色で、しっしつなどと、足を踏んでおどしてみても、ひらひらと踊るように、少し動いてみせるばかりなのである。

しかし、木の葉の下から、出てきたのは、意外にも、二〇センチばかりの亀であった。久しく見なかった亀であるが、庭の隅からはい出して、ものなれた様子で、池の中へ沈んで行った。

(一九八四年十月・カット、原田道子)



中 島 み ど り 訳・解説

本書は「幹校六記」と「父の回想」の二つの文章を収める。

幹校とは、中国で、一九六六年五月、毛沢東の指示とともに始まった「プロレタリア文化大革命」の中で、行政機関や大学・研究所などの学術機関、文化団体などの幹部・知識人を思想的に再教育するために、主として農村に設けられた「五・七幹部学校」の略称である。その教育は生産労働と階級闘争の学習を通じておこなわれた。

著者は中国社会科学院外国文学研究所の、著者の夫の銭鍾書氏は同院文学研究所の、研究員であった。一九六九年十一月銭氏が、翌年七月著者が、河南の農村の幹校に送られ、一九七二年まで、ここで再教育をうけた。六章からなるその記録が「幹校六記」で本書の九〇頁まで。以下一八一頁までが「父の回想」で、著者の父楊蔭杭についての記録。そのあと二〇五頁までが「訳者のあとがき」である。

わたしは「うつむいて暗がりに向いている」のが好きです。

「日本語版への序」を読んで、著者のこのつぶやきにうたれた。「幹校」についての六つの章の基調はこのつぶやきで、どの細部にも基調を乱すものはない。

折檻をうけることを鍛練という。鍛練に耐える準備をする以外に、何の準備があるう。

うつむいて暗がりに向いているのは、陰鬱な精神には耐ええないうこと。著者の「好き」の中にはそのような陰鬱の入りこむすきがない。

我々の「中隊」は一九七〇年七月十二日に幹校へと出発した。まえのとき黙存へ錢氏のよび名を見送ったのは、わたしと阿円へ著者の娘とそれに得一へ阿円の夫がいた。こんどわたしを見送ると、残るのは阿円一人だった。得一は一月前に自殺して世を去っていた。

自殺した人は「極左派」の嫌疑を受けていた。その事情も簡潔な十行で述べられる。

「小越」という子犬についての一章は、ユーモラスで、冬の日向のように読者をほほえませる。

どろどろの沼のようになった雨のぬかるみ道を「難行苦行のすえ」夫に会いにゆき、すぐ引き返し、まったく方角のわからぬ暗やみの野を宿舍にたどりつくまでの、危機にみちた甘美なランデブーの一章に、わたしはため息をついた。六十歳をこえた婦人にも、こんなにみずみずしい恋がありうるのか、と。

六章は、それぞれ、光と影のようにやさしいが、次の文章を読むと、沈黙するほかなくなってしまう。

年が明けて清明節の日、学部は明港に移動した。出発の前、我々菜園組の全員はもとの菜園へ帰ってきて、建物を全部こわしてとりはらった。ひきぬけるものはぬき、ばらせるものはばらした。トラクターがまたきて、土地をひととおり耕した。出かける前、わたしと黙存はひまを見ていっしょに菜園へ、一眼別れを告げに行った。見ると小屋はもうなくなっていた。井台もない、用水溝もない、野菜のうねもなくなっていた。あのひらたい土饅頭へ墓さえも行方がわからなくなっていて、ただ一面に土の塊りがころがる、何も無い大地が広がっているばかりだった。

訳者も「あとがき」で触れている。深切な解説がなければ、この文章の来しかた行くさきをはかりえなかった

だろ。

長い間わたしは中国文学に親しんできた。しかし近代のそれには疎く、中国の民衆の、知識人の、おかれてあるありのままの姿が、見えていたとは言えない。昨年、中島長文氏と訳者らが編訳した『中国の一日』によってその一部をかいま見、いま本書によってまたその幾分を見せてもらって、おのれの知見の浅さをかえりみる。

「父の回想」には、浅い知見のなかでも親しみのある名前があらわれ、詩文からは伺えなかったその人たちの素顔が見えてなつかしいが、なつかしがるわたしが、彼らにとっては敵であった国の人間であることを思うと、胃がしめつけられる気がする。わたしは、ともすると、それを忘れようとするのだが、

慚愧はいつも人を忘れっぽくさせる。

という、錢鍾書氏の「はしがき」のことばに、頬が熱くなる。

むかし、ソルジェニーツインの『イワン・デニーソヴィッチの一日』を読んで感動した。楊女士の文章は、さらに沈静であるように感じ、訳者の筆は、それをよく日本語に移している、と思った。ロシア語を知らず、この本の原文を読まずにいうのは、僭越の沙汰ではあるけれども。

※訳者の示された正誤

四〇頁「地主めがみな持っていきやがった!」↓「地主だつてひろわせるのにさ!」一六四頁「心期独吟」↓「独吟」一八〇頁注(48)綴白裘 伝奇小説の集↓芝居のさわりを集めた書物。二〇四頁、早稲田大学学

生課↓学館課 八六頁「宋詞選注」↓「宋詩選註」一七七頁「文学改良芻義」↓「文学改良芻議」



杉本秀太郎 解説

お手紙と、あなたの解説三章を付けた再刻・『音楽巡礼』を、三月十六日にいただきました。八日から風邪で寝込み、熱がやっと引きかけたところ。床の中でぼつぼつ読みました。わたしは、兼常さんの「名を心得ている」年配の「最年少」で、学生のところ雑誌でちょいちょい読み、「音楽概論」や「日本の言葉と唄の構造」など数冊は本棚のどこかに眠っているはずです。一九二二―三年に書かれた『音楽巡礼』が、六十年後の散文の群に入っても少しも古さを感じさせないことに驚きました。日本語は、（別に調べたわけではないが）、大正から昭和にかけて一度、第二次大戦後に一度、いちじるしい変動がおこっている、と感じるのに、兼常さんの文章は、そんな変動にはびくともしない明哲な、つまりは新しい文章だったのだな、と思いました。まわりの誰もが顧みない時に、目をつけ、著作のほとんどすべてを読み、三つの短い文章で、兼常さんのよさをくつきり描いたあなたのやりかたには、恐れいります。この本のどの章も興味ふかいが、一つだけ挙げるとすると「リユーネブルクの荒野」がよかったです。著者の生涯を象徴する味わいです。これ以上書いても蛇足になりましょう。風邪がおつたら『音楽概論』などを採り出して読むつもりです。余談ながら、先日、久しぶりにショパンの「マズルカ」をブライロフスキーのレコードで聞き、ずいぶん重苦しいな、と思いました。ブライロフスキーでない、ショパンをきいた気がなかったわたしなのに。変なものです。

※前号八頁に「書かれていない：：」といった飯沼愨斎の伝記は昨秋刊行されたと、高橋達明氏に教えられた。



これまで、ほぼ、李清照の前期の作品と考えられるものを取りあげた。これから、後期のものと思われる作品を扱うことになる。そこで、わたしの要を整理する意味で、彼女の年譜を掲げておく。主として王学初「李清照事跡編年」により、他の年表を参考にして、なるべく簡単に記す。年齢はすべて数え年。

一〇八四 皇帝は神宗。元豊七年。清照生まれる。十二月、司馬光「資治通鑑」完成。

一〇八五 三月、神宗死に、子の哲宗があとをつぎ、太皇太后の高氏が政を聴く。五月、司馬光、門下侍郎となり、新法の主だったものをやめる。

一〇八六 元祐元年。閏二月、司馬光、相となる。四月、新法の提唱・推進者であつた王安石が死ぬ。九月、司馬光が死ぬ。

一〇九三 九月、高氏死に、帝みずから政をとる。新法、次第に復活。

一一〇〇 正月、哲宗死に、弟の徽宗がつぎ、皇太后向氏が政を聴く。

一一〇一 建中靖国元年。正月、向氏死ぬ。清照、十八歳、趙明誠と結婚。明誠は二十一歳、太学の学生だつた。このとき、清照の父李格非は礼部員外郎、明誠の父趙挺之は吏部侍郎で、ともに京師（汴京、東京。今の河南省開封市）に住む。この年、蘇軾、秦觀、陳師道等死ぬ。

一一〇二 崇寧元年。清照十九歳。夏五月、趙挺之、試吏部尚書・兼侍讀・修国史・編修国朝会要から、中大夫に遷り、尚書右丞に除せられる。秋七月、旧法を支持した「元祐党」人の追放名簿が発表され、清照の父李格非の名も含まれる。八月、趙挺之、尚書左丞に除せられる。九月、徽宗自書の追放名簿が碑に刻んで端礼門に建てられる。格非の名もとよりそこに含まれ、清照は夫の父に詩を贈って救助を訴える。

一一〇三 清照二十歳。夏四月、趙挺之、中大夫・尚書左丞より中書侍郎に除せられる。この年、夫の明誠出仕。  
一一〇四 清照二十一歳。秋九月、趙挺之、右光祿大夫・中書侍郎より門下侍郎に除せられる。

一一〇五 清照二十二歳。春三月、趙挺之、門下侍郎より右銀青光祿大夫・尚書右僕射・兼中書侍郎を授けられる。清照、政治家として自重してほしい旨の詩を献じる。夏六月、趙挺之、右僕射をやめ、金紫光祿大夫・観文殿大学士・中太一宮使を授けられる。冬十月、夫の明誠、鴻臚少卿を授けられる。

一一〇六 清照二十三歳。春正月、元祐党人の追放を解除する。二月、趙挺之、観文殿大学士・太一宮使より特進光祿大夫・尚書右僕射・兼中書侍郎を授けられる。二月、明誠の兄趙存誠、衛尉卿より集賢殿修撰・提舉醴泉觀となる。

一一〇七 清照二十四歳。春三月、趙挺之、右僕射をやめ、特進・観文殿大学士・佑神觀使を授けられ、五日後に死ぬ。年六十八。明誠と清照は明誠の郷里青州に退居する。以後十余年、明誠は『金石錄』作製に励み、清照はこれを助けたようである。この時代が彼女にとっては最も楽しいときだったのであろう。

一一一二 政和二年。清照二十九歳。この年、明誠の兄存誠は秘書少監だった。



一一一五 清照三十二歳。春正月、北方の女真人が国を建て金と称する。以後しばしば宋の領土を侵す。

一一二一 宣和三年。清照三十八歳。この年、明誠の兄思誠は中書舎人になっており、たぶん夏秋のころ明誠もまた山東の萊州の長官に任ぜられたらしい。清照は秋八月、夫の任地で詞詩を作っている。

一一二五 清照四十二歳。契丹人の国遼が、二月、金に滅される。徽宗は位を太子に譲る。欽宗である。この年陸游が生まれた。

一一二六 靖康元年。清照四十三歳。春正月、金軍、宋都を攻め、徽宗は東に逃走し、欽宗も逃げようとするがいさめられてとどまる。明誠は權州の長官に転じ、十二月には直秘閣に特除され、さらに一官を転じているようである。宋の朝廷では、金に対する主戦派と和議派が争い、右往左往の状態。

一一二七 建炎元年。清照四十四歳。正月、宋は河北・河東を金に割譲する。同地の人たちは金に抗戦する。欽宗は金軍にとらえられる。二月、金は欽宗・徽宗を庶人におとし、四月、かれらを北に連れ去る。徽宗の第九子が南京で即位する。高宗である。明誠は、三月、母が金陵で死んだことを聞き南下、秋八月、朝散大夫・秘監修撰の身分で江寧府知事兼江南東路經制使となる。この前後に、清照は書籍などを十五車にのせ、建康にゆき夫に再会する。冬十二月、青州に兵乱があり、もとの家にのこして来た書冊等、十余屋が焼失。このあたりの事情は、いろいろ問題があつて、学者の間でも諸説紛出。まずざっとしたところしか分らない、といつておくほかはないだろう。

一一二八 清照四十五歳。春、清照は江寧に到着。冬、黄河以北はすべて金に降る。清照、宋の朝廷・軍隊のふ

がいなさを嘆く詩二首を作る。

一一二九 清照四十六歳。一月、金軍南下し、二月、高宗は杭州に逃げ、明誠は江寧の長官をやめる。三月、高宗、一部の臣に迫られ位を皇子に譲る。明誠は清照とともに舟で難を避け、安徽の姑孰（今の当塗）で仮り住まいする。四月、高宗復位し、五月、江寧にゆき、改めて建康府とする。明誠一家は舟で池陽（今の貴池）にゆき、そこで明誠は浙江の湖州長官となるべき命令をうけ、六月、清照をのこしてひとり建康の行在にむかう。七月、杭州が臨安府と改められる。月末、清照は明誠の発病を聞き、池陽から建康にゆく。八月十八日、明誠が死ぬ。四十九歳。清照は祭文を作り、葬る。閏八月、王継先が黄金三百両で明誠の遺品の古器を買う。高宗が目つけて買わせたものらしい。こののち金兵南下し、高宗は建康を離れ亡命の旅に出る。清照は遺品の大部分を江西の洪州にいる妹むこの許に送り、自身は手まわりの物を携え、皇帝のあとを追う。十月、高宗は臨安府にゆき、さらに越州（紹興）にゆく。十一月、金兵は洪州を破り、建康を破る。十二月、さらに臨安府が破れ越州が破れ、高宗は明州（寧波）にゆき、定海にゆき、昌国（舟山島）に逃れ、船で海上をさまよう。清照は皇帝の一行を追いながら持物のほとんどすべてを失う。

一一三〇 清照四十七歳。正月、高宗の船は台州にゆき、温州にゆき、二月、温州の江心寺にとどまる。清照も温州に行った。三月、金兵が臨安から引きかえしたとの報をうけ、高宗は越州にかえり、清照も越州にゆく。十二月、清照は越州にゆく。この年、朱熹生まれる。

一一三一 紹興元年。三月、清照、越州にゆき、盜難にあう。八月、秦檜、相となる。



一一三二 清照四十九歳。正月、高宗、臨安府にかえる。たぶんそののち、清照も臨安府にゆく。夏、張汝舟と再婚し、まもなく離婚したらしい。この真偽につき、学者・評家の間で大論争が繰り返され、いまもって結着はついていない。わたしとしては、そんなことより、彼女の詞を正確に読むほうに心をむけたい。とはいっても今後その問題には全く触れぬ、と今から断言するわけにもゆかぬが。八月、秦檜が相をやめる。

一一三三 清照五十歳。五月、宋と金の間で和議。この年、清照は韓肖胄あての詩を作る。

一一三四 清照五十一歳。秋八月、「金石録後序」を作る。冬十月、金兵南下し、清照は金華に避難し、十一月『打馬図経』を作る。一種のすぐろく集である。岳飛の軍が金兵を蘆州で破る。

一一三五 清照五十二歳。春、詞詩を作り、たぶん夏、臨安府にかえる。四月、徽宗、金で死ぬ。

一一四〇 清照五十七歳。夏、岳飛をはじめ宋軍、大いに金軍を破る。この年辛棄疾生まれ、日本では西行出家。

一一四一 清照五十八歳。十月、秦檜、岳飛を獄に下し、十一月、金と和し臣と称し、十二月、金に地を割き、岳飛を殺す。

一一四三 清照六十歳。夏、「端午帖子詞」を作る。

一一四四 清照六十一歳。この年、朱弁なる人が六十歳で死ぬ。その著書『風月堂詩話』に清照の詩の断句二則をのせる。なお、日本では、六月、藤原顕輔が『詞花集』を撰上。

一一四六 清照六十三歳。正月に曾慥なる人が完成した『樂府雅詞』に清照の詞二十三首をのせる。なお、清照の詞をのせる本としては、一一二九年に黄大輿が著した『梅苑』に六首を取めるのが最も古いようだ。

一一五〇 清照六十七歳。この年、清照は書法の大家米友仁を訪ね、その父米芾の書いた帖子に跋を求める。  
一一五一―一一五五 清照六十八―七十三歳。『金石録』を朝廷に献上する。

これ以後の消息はわからないが、たぶん数年のうちに死んでいるだろう。清照の年譜といっても、彼女のごとはほんの少し。だが当時は、中国だけでなく、たぶん世界中どこでも、婦人についての記録はあまりなく、彼女については、これでも多い方である。つまりはそれだけ、いい意味でも、よくない意味でも話題になったということであろう。彼女への非難は、例の「詞論」の無慮と、「再婚・離婚」に向けられている。「詞論」についてはすでに言った。「再婚・離婚」を非難する男たちが、自身再婚・離婚せず、めかけも持たなかったかということ、それでもない。それが当時の社会通念といえはそれまでだが、社会通念をつき破って生きる果敢さから彼女の文学が生まれた、とわたしには感ぜられるので、彼女に対する非難はみなのはずれだという気がする。

彼女の詞詩の作時は推定しうるものもあるが、ことに詞の方は、前にもいったように、よくはわからない。それを推定し、無理なく（あるいは少く）説明することが学者の仕事になっている。せつかくの成果、大いに利用させていただいて、わたしはわたしの読みかたを進めたい。

一九八五年三月二十四日

び　　る　　しゃ　　な　　ーランカーの岸辺で　　(六)　　ー

原　田　憲　雄

前回の終りに近いところで、法蔵を「漢人」とするよう書きかたをした。法蔵の祖先は康居、すなわち中央



アジアのサマルカンドのひとで、祖父にあたる人が中国に来て長安に住んだ、という。水谷真成氏によれば、サマルカンドの王はトルコ系らしいが、人民はイラン系ソグド人。法蔵はそのいずれかであろうから「漢人」ではない。白居易もその祖先は中央アジアの人だったという説があるが、鮮卑系の祖先をもった元結とともに進めた新楽府運動では、極めて漢人的な中華思想を鼓吹する。法蔵にもあるいはそのような心理が働いたのかもしれない。もっとも、唐代は中国でも他の時代とはだいぶ様子が違っているので、ここらの問題はもっと研究をつきつめた上でないと、断定的なことはいえない。法蔵の華嚴教学なども仏教思想の中国的変容の例に挙げられることもあるようだが、法蔵をサマルカンドの方に力点をおくか中国人の方に力点をおくかによって、その評価も微妙に変化しそうである。

前置きがすこぶる長くなつたが、こちらで切りあげて、十巻本・魏訳「入楞伽經」の本文にはいつてゆくことにする。テキストは『大正新編大藏經』第十六巻に収めるもの。参考にする漢訳經典も、別にことわらないかぎり大正蔵による。楞伽の梵本はヴァイドヤ本によつた。ただ南条本の三十三頁までのコピーを高橋達明氏が惠授されたので参照しえた。またインド学・仏教学関係の文献を手に入れるため柳田聖山氏のお世話になつた。ともに深謝する。

経題は「入楞伽經」、宋訳は「楞伽阿跋多羅宝經」であり唐訳が「大乘入楞伽經」であることは前に何度も記した。梵本經典では経題は最後に記されるのが例で、この経でも *Ityāryasaddharma Lanikāvātāro nāma mahā-*

yānasūtram saśāhikam samāptanti (以上、聖なる正法の「ランカーに入る」と名づける大乘經の偈頌、完了)とあるから「聖なる正法の「ランカーに入る」と名づける大乘經」がフルネームで、「ランカーに入る」がそのかなめ、ということになり、漢訳諸本の訳題はそれぞれに正しい。ただ、法蔵は、宋訳題名の「宝」字は梵本にも魏訳にもない、というが、これはグナパドラがこの經の心をつかんで与えたもので、とがめるにはあたらず。法蔵は梵語の *Janaka* は中国語でなら「難入」「険絶」「可畏」の義だといひ、以後の注家はみなこれを襲うが、わたしの見たかぎりの梵語辞書には、そんな説明は見あたらず。*Janaka* はやはり地名とすべきであろう。*avatāra* についても、「上から下へ入る」のであって、中から入り、下から入るのは、梵語では別の語を使用する、という。これはその通りだが、本文を読むと分るように、この經で「上から下へ」おりてくるのは、ほさつたちで、世尊は海の下からランカーに上ってくる。そのところが、法蔵の説明ではかたがつかぬ気がするが、いかがであろう。バラモンの神々が動物などの姿をとって化身顕現することを *avatāra* という。これも神(上)から動物(下)へ入ることには違いないが、この經ではむしろ、その化身、顕現、の意で *avatāra* の語が使われているように感ぜられる。いずれ後に、くわしく考えなければなるまい。次は品題。

「請仏品第一」。宋訳は、はじめからしまいまで「一切仏語心品」で、それに第一之一、第一之二……といった区切りかたがしてある。グナパドラの使った梵本にそうあったのか、かれが意をくんでした業か、わからない。唐訳は「羅婆那王勸請品第一」。梵本には *Ravanādhyesānāparivāro nāma prathamah* (ラーヴァナの勸請品



と名づける第一」とあるから、唐訳と合う。魏訳なら「仏をおまねきする章 第一」、唐訳なら「ラーヴァナが（仏を）おまねきする章 第一」の意。次は帰敬頌。以下、拙訳経文の頭に一連番号をつけておく。

『大智の海なるびるしゃな仏に命をささげます。』

梵文・パーリ・チベットの經典には巻頭に帰敬頌を掲げるものが多い。漢訳ではつけない方が多い。ボディールチの訳経論では梵本になかったと察せられるもの以外はみを出している。かれが訳業において原典に忠実であつた一つの現れ、とみてよいだろう。この頌は宋・唐訳になく、梵本にはあるが「オーム、三宝に帰命する。オーム、一切の仏と菩薩とに帰命する。諸法の無我なることが法へ王へよつて示されているところの、かの入楞伽経が、ここに努力をもつて記される」（安井訳。へ、内は原田が補つた）とあつて文句が違う。

ボディールチの訳文は「帰命大智海毘盧遮那仏」、帰命という漢訳は大層なことだが、梵語では敬礼するといふほどの意味である。「大智」を一本には「大智慧」とする。これと同じ帰敬頌が『大薩遮尼乾子所説経』にもついでいて、「外国本の一切経のはじめにはみなこの句がある」と割り注している。「この句」とは帰敬頌の一般をさし、「大智の海なるびるしゃな仏：：」をさすのではないだろう。というのは、ボディールチの訳経以前に帰敬頌にびるしゃなの名を掲げるものは、まったく無く、ボディールチ以後にも、五五九年長安に来たガンダーラのジニャーナグプタの訳した『仏本行集経』、八十華嚴のシクシャーナダの訳した『大乘四法経』にあるだけで、新・旧華嚴にもびるしゃなへの帰敬頌はついていない。あとは、「仏・菩薩」や「三宝」にささげる。

宮坂有勝氏によると、『大乘四法経』には三本『大薩遮尼乾子経』には一本、チベット訳があるが、いずれも帰敬頌は「一切の仏菩薩に：：」と改変され、「もはや信仰対象の形態が推移したあとが看取される」（インド古典論）。それなら楞伽の頌も魏訳が古型で、今の梵本のは改変した後のものと推定してもさしつかえなさそうだ。前稿でこの頌に注目して以来、びるしやなについて調べ、びるしやながアスラ（阿修羅）であり、ヤクシャ（夜叉）の同類であることに気付き、驚くとともに、ヤクシャの王ラーヴァナを聞き手として始まるこの経の帰敬頌にびるしやなが招かれている意味の確かさに感嘆した。昨年、宮坂氏の『インド古典論』の「YAKSA考」と「アスラからビルシヤナ仏へ」を読み、わたしの考えたよりはるかに周到にアシュラ、ヤクシャにつき論ぜられているのを知った。ただ氏の論にないいくらかでわたしの考えついたものもないではない。また佐藤任氏の『悲しき阿修羅』にはアスラについての近ごろのインドの学者の説が紹介してある。それらをまぜて、ここに必要なることを手短かに述べる。

びるしやなはサンスクリットの Vairocana, Virocana, Bāri, Verocana だといわれ、vairocana は「輝く」義の語根rucより転化したrocanaに前接辞vai (viの变化形)を加えた語で「太陽に付属するもの」「太陽の子」を意味し、virocanaは、同じくrocanaにviを加えた語で「輝きつつあるもの」の義をもち、太陽もしくは太陽神を意味し、漢訳經典に「光明遍照」等とするのはその意をとったのだろう、といわれる。

ところで荻原雲来『梵和大辞典』（以下≡と略称）はvairocanaに形容詞「太陽の」男性名詞「Virocanaの息子」「Baliの父系」なる解を与え、Virocanaに形容詞「照らす」男性名詞「太陽、太陽神」「月」「Vi-



「*śnu* 神の名」「ある *Asura* の名」「*Bali* の父」と解する。*Bali* は漢訳仏典に「婆稚」等の音写で示されるアスラである。どちらも *Bali* の父、父系である点はよすとして、*Vairocana* が *Virocana* の息子、とあるのはどうしようことになるのだろう。モニエル・ウィリアム『梵英辞典』（以下  $\equiv$  と略称）でもこの点ははっきりしない。なお *Bali* については「*Virocana* の子で三世界の主権を獲得したが、こびとの形で現われた *Viṣṇu* 神に対して三歩だけの土地を与えることを約束した。*Viṣṇu* 神は三躍歩により悉く三世界を占領し、*Bali* は下界 (*Prthvī*) に追いやられわずかにこれを領することを許された」と説明する。この神話は、ランカーからギリ島に「世尊」の甘言によって追放されたヤクシャの運命を描く『島史』の第一章に通うものがある。

さて、ゴータマ・ブッダ以前に成立したとされる『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』の第八章第七節に、*Virocana* の名が見える。

「罪なく、老いず、不死にして、憂いなく、飢えなく、渴きなく、欲望はみたされ、意図の実現されたるアートマンを見出し、識る者はすべての世界を得、あらゆる欲望を満足させる」と創造主ブラジャーパティが説く。神々もアスラたちもこれを聞き、アートマンをさがそうとする。そうして、

iti Indro haiva devānamahipravavṛja Virocana sṛṅgam,

「神神からはインドラだけが、アスラたちからはヴィローチャナだけが(ブラジャーパティの許に)出かけた」というのがそれである。(S. Swāhānanda 訳注本) 三十二年たつてブラジャーパティはふたりに「目の中に見える人がアートマンだ」と教え、水面や鏡に見えるものも同じだといひ、ふたりに水盤に映るおのれの姿を見せ、そ

れがアートマンだと示す。ふたりは満足して去る。ブラジャーパティは見送りながら「かれらはアートマンを理解せず見出さず帰る。神にせよアストラにせよ、この教えをウパニシャッドとするものは滅びるだろう」とつぶやく。ヴィローチャナは教えられた通りアストラたちに伝えるが、インドラは疑問をいだいて引き返し、さらに三十二年後「夢のなかで楽しみながら歩きまわるものがアートマンだ」と教えられる。これにも疑いをいだき、さらに三十二年修行し「人が眠り夢も見ないときがアートマンだ」と教えられ、これも疑い、さらに五年修行した後次のような教えを受けた。不死なるアートマンは、死すべき身体に拠る。人が熟睡すると、アートマンは身体を離れ、最高の光輝に達し、みずからの形を現わし、食べ、遊び、女たちと楽しむ。このアートマンが知覚や思考の主体であり、死すべき身体に宿るアートマンを知覚や思考の主体として見出した者には、一切の世界が得られ、一切の欲望が達成される。

ここではヴィローチャナはブラジャーパティにあざむかれた（あるいは真意を悟らぬ）愚かな者とされ、インドラはブラジャーパティの奥義を伝えられた正統とされる。いまのわれわれから見れば、話は初めからインドラに有利に、ヴィローチャナに不利に仕組まれているので、神々が栄え、アストラが滅びるのはあたりまえである。しかし、アストラは滅びず、神々はかならずしも栄えない。ヴィローチャナの持ち帰った影像説は、仏教の中にはいつて洗練され、楞伽經の基本教条の一つとなつてよみがえるのではないか。（これは余談だが）。次は仏典。

『南伝大蔵經』（以下南伝と略称）第七巻に収める『大会經』はカピラ城での世尊の会座に天神・鬼神たちが集合する、というだけの話を詩にしたものだが、次のような句が見える。表記は適宜に改める。



金剛手の為に打ち負かされたる／アスラは海に住す／彼等はヴァーサヴァの同胞にして／神通を具し名声あり／…／又すべてヴェーローチャと称する／パリの子等一百は／有力なる軍勢ラーフパッダを糾合せり／漢訳ではカシユミルのブッダヤシャスが五世紀のはじめに訳した『長阿含経』卷十二の「大会経」(大正蔵第一卷)に当るが、右の所は世尊がアスラのため結んだ呪文になっている。漢字はわたしの手持の活字にないものが多いため大正蔵の注に引くパーリ文を掲げておく

Jitā Vajira-hatthena samuddam Asurā sitā, Bhūtarō Vāsavass' ete Iddhimanto (yasassino) .  
...saha Satāṅ ca Bali-puttānaṃ sabbe Veroca-nāmakā, Sannayhitvā baliṃ senaṃ Rāhubbaddam upāgamun: ...

同経の異訳「大三摩惹経」では Verocana にあたるところを「光明照耀」とする。

次は南伝第十二巻に収める「帝釈相應」(サッカ・サムユッタ)第一品第八のヴェーローチャナ・アスラ王。その時また世尊は日中室に入りて静観したまいき。時に天帝釈とヴェーローチャナ・アスラ王とは世尊にいたれり。いたりて各おの戸の両脇によりて立てり。時にヴェーローチャナ・アスラ王は世尊の御許にこの偈を説けり「その利の達せらるるまでは／人は励まざるべからず／その利達せられて輝く／これヴェーローチャナの語なり」と(帝釈)。「その利の達せらるるまでは／人は励まざるべからず／その利達せられて輝く／忍辱に勝るものなし」(ヴェ)。「一切の衆生にはその分に応じ／それぞれその必要生じ来る／美味の混ぜ飯の／すべての人を樂しましむるに足る如く／その利達せられて輝く／これヴェーローチャナの語なり」

(帝釈)「一切の衆生にはその分に応じ、それぞれその必要生じ来る、美味の混ぜ飯の、すべての人を樂し  
ましむる如く、その利達せられて輝く、忍辱に勝るものなし」と、

これにあたる漢訳は、宋訳楞伽のグナバドラが訳した『雜阿含經』の卷第四十(大正藏第二卷)に見える。拙訳。

世尊が舍衛國の祇樹給孤獨園におられたとき天帝釈とびるしゃなの子のバリ・アスラ王がいた。すぐれた容姿  
であった。朝はやくともに仏の所にやってきて敬礼し座った。さて、帝釈とびるしゃなの子バリ・アスラ王は  
体から光をはなち圓一面を照らした。そのときびるしゃな・アスラ王は仏に対し偈を唱えた「人は手段に勤め  
るべきだ、きつと満足すべき利益がえられる、利益が満足すれば、もはや手段はいらぬ」。すると帝釈がいう  
「人が手段に勤めれば、きつと満足すべき利益がえられる、利益が満足しても、耐え忍ぶなら最上だ」。さ  
てふたりは仏にいう「世尊よ、どちらのが善いでしょうか」世尊がいう「どちらもいい。が、まあわたしのを  
聴きなさい。『すべての衆生は、みな利益を求める、衆生はそれぞれにとっての、必要なものを求める、世間  
における混合したものと、第一義の真理とでは、混合したものは、恒常の真理ではない。人が手段に勤めれば  
、満足した利益がえられよう、利益が満足しても、忍耐するのが最上だ』さて天帝釈とびるしゃなの子バリ・  
アスラ王は仏の説を聞き歡喜して敬礼し去った。

ランカーの上座部が伝持したものと、北方で伝持されたものと、同じ小乗經典でも、かなり形が交っている  
ことがよくわかる。南伝でびるしゃなとするものを、北伝ではびるしゃなの子のバリとする。もつとも一カ  
所びるしゃなアスラ王とする所があった。南伝では帝釈とびるしゃなの間答だけで、形から見て帝釈の勝利



となつてゐる。帝釈とはインドラである。つまり南伝では『チャードーギヤ・ウバニシャッド』のインドラ対ヴァイローチャナの優劣がそのまま持ちこまれている。北伝でも、結果的には帝釈に軍配が上つたことにはなるうが、形としては、びるしゃなの偈もインドラの偈もよしとした上で、仏の語として誤傳的な偈を指示したことになつてゐる。

このことから、次のようなことが推測される。ランカーの上座部では「びるしゃな」はあくまで「アスラ」であり、バラモンの神インドラ以下であつた。びるしゃなもインドラも仏教への帰依者・守護神とされた後にも。だが、北方では、大乘教徒の間でびるしゃな信仰が高まるにつれ、小乗教徒の間でもびるしゃなの地位を高めざるをえず、びるしゃなを、天神、淫さつ、：：と変形し、かつてのアスラ王びるしゃなの代りにびるしゃなの子のバリを当てるようになったのだ、と。グナバドラが『雜阿含經』を訳した五世紀は、ちょうどその過渡期にあたり、過渡期のあいまいさがグナバドラの訳文に「びるしゃな・アスラ王」と「びるしゃなの子バリ・アスラ王」とを混在させることになつたのだ、と。そう考えれば、ともにバリの父でありながら、VairocanaがVirocanaの息子とされるのもよくわかる。もともとふたつは同じだつた。だが、びるしゃなを昇格しアスラから足を洗わせる過程で、VerocanaをBaliの父とし、それがVirocanaとなり、一方VairocanaはアスラのままではつておかれたためにBaliと同じVerocanaの子の位置に転落した。：：

こういう推測は、われながら、素人の思いつきめいて、気はずかしいが、専門家の論説でも、インド神話の系譜に関し、わたしの目にしたところ、わたしの推測程度の論もかなり幅をきかしてゐる。言い方かえ

ると、その程度しか、研究が進んでいないように見える。

さて、わたしの推測を助ける例の一つあげておこう。

さきにも引いた『洛陽伽藍記』の第五巻は宋雲なる人の西域旅行の記録で、中に次の記事がある。入矢氏の訳を、表記を少しかえて引く。ここに見える「ビルセン」は *Vairocana* である。

コータン王は昔は仏法を信じていなかった。ある胡の商人がビルセンという名の一人の比丘を城南の杏の樹の下に連れてきた。そして王の裁きを乞うて言った。「ただいま異国の沙門を城南の杏の樹の下に連れて参りました。王はそれを聞くとたちまち怒って、すぐにビルセンに会いに出かけた。するとビルセンは王に語った「如来の仰せにて、王に覆盆の塔を一基を作らしめ、王業を永えに榮えしめよと承り、その使いとして遣わされました。ございます」。王「わしに仏を見せてくれ。そうすれば直ちに命に従おう」。そこでビルセンは鐘を鳴らして仏に告げた。仏は直ちにラゴラを遣わして仏の姿に変えさせ、空から御姿を現わされた。王は五体を地に投じてひれ伏した。そこで杏の樹の下に寺舎を建てラゴラの像を描いたが、像は忽然として消えてしまった。コータン王はさらに精舎を作り、その中に描きこめた。今は覆盆の影がいつも屋外にさし出で、それを見る者で回向しないものはない。……

ここでは、びるしゃなは、アスラではなく、しかし華嚴經におけるように、ぼさつでも如来でもなく、比丘である。この話は七世紀に書かれた『大唐西域記』にも記され、びるしゃなはカシユミールから来たアラカンとされる。カシユミールは小乗の榮えた国で、そこではびるしゃなはアラカンとされたのだろう。(三月三十日)